

が説によるとぞ、又猿の異名を馬留といへり、されど牧馬に猿が乗ば、馬多く斃るといふゆり、河童はよく馬をなやますものにて、甚猿を畏る、よし、物語多き事なれば、此故なるにや、馬經にも厩に母猴をかへば、馬の疫癘を除くよし見えたり、又宋朝に馬撫神あり、其形像兩足に鶴鶴と猿を踏み、兩手に劔を執とぞ、是は陰陽家厩鎮の神也、

〔羅山文集十八〕馬厩額板畫猿記 堀田加賀守正盛求之

夫繫猿于厩善除馬病所從來已久矣、物理之自然不可誣也、按東晉幕府趙固乘馬疾將繫固甚惜之、郭景純以奇術得一獸于社林而來、其形如猿、置之馬前、獸以鼻吸馬、馬起躍如初、李氏獨異志謂、世以獼猴置馬厩、此其義也、白香山題周皓大夫亭云、獼猴看樞馬者、是其所見歟、又方書載、獼猴皮治馬疫氣、馬經云、厩畜母猴辟馬瘟疫、逐月有天癸流草上、馬食之永無疾病、何可誣哉、今揭厩額畫以猿、則可知馬之無疾病而肥健、且衆多也、唯繫獼猴而不察雞豚可乎、且夫古人以名馬喻人才、千金馬必有千里之能、庶幾知人者、如孫陽如九方臯也、加之衛侯賅牝三千、以乘心塞淵故也、僖公牧馬之盛、以思無邪故也、可不思乎、於是乎書、

〔嬉遊笑覽十二〕猿まなこ、蚤とり眼は同じ事なり、守武千句に、こすゑより来てこそほゆれ犬櫻、さるまなこにて花をみる頃、丹前能に、好物をいへば、猿がのみ取眼云々、今のみとり眼とのみいふは省きたること、みゆ、

〔常陸風土記久慈郡〕自郡西北六里河内里、本名古々之邑、俗説謂猿。壁爲古々、

〔倭訓栞中編九〕さるのみさけび 猿の三叫也、詩に三聲などいへるは、峽猿の物かなしきをのべたり、巫峽啼猿數行涙などいへるによれるや、躬恒集猿の歌に、
心あらばみたびといふたび鳴聲を物思ふ人にきかせざらなん

〔夫木和歌抄二十七〕六帖題

信實朝臣